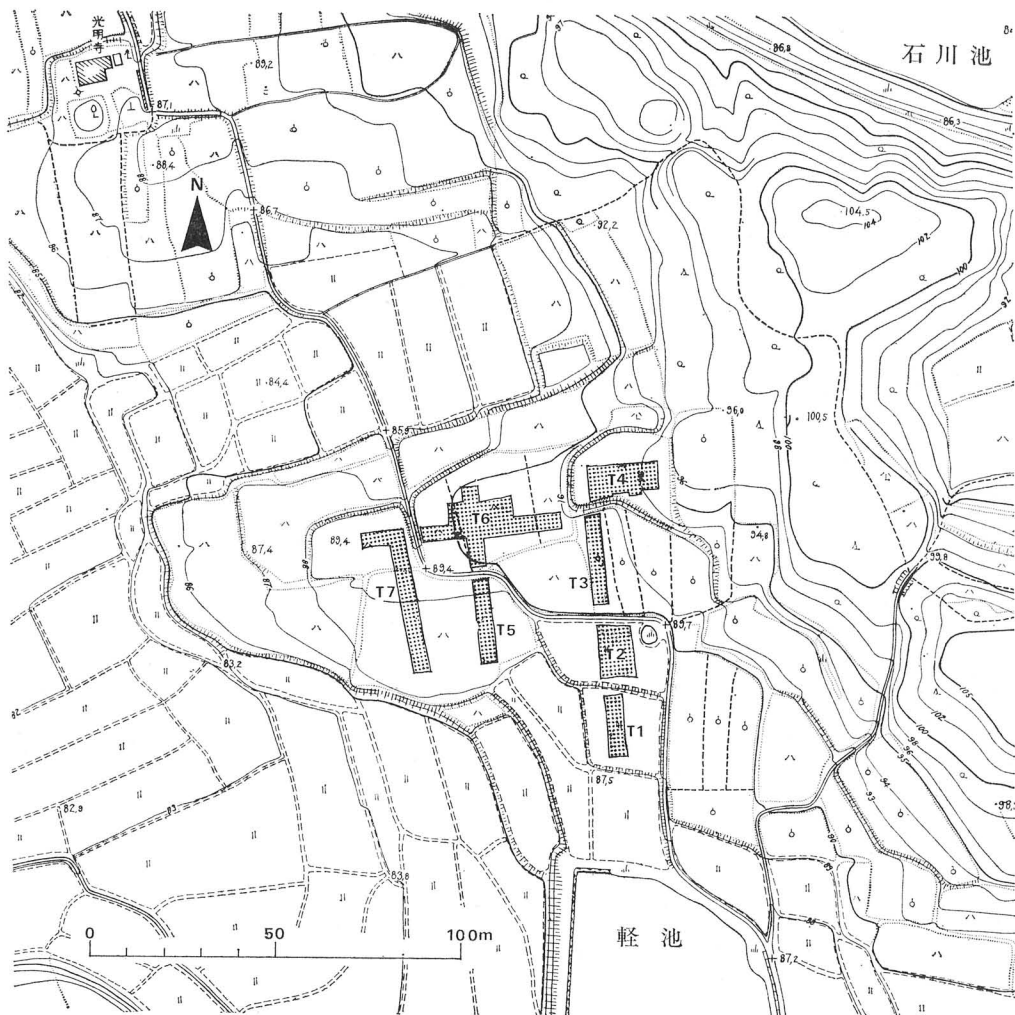


IV 遺 構

調査地に設定した各トレンチは、第8図に示したように、東南から番号を付しT1～T7区と呼ぶ。今回の調査で検出した主な遺構はT4区の竪穴住居3棟、T6区の掘立柱建物1棟、T2区の大溝があり、そのほか土壌、小穴などがある。

調査地のT4区・T6区・T7区は東西にのびる丘陵上にあたり、現在畑地になっている。これらの地区とT1、T3区では15cmほど表土の耕作土を排土するとすぐ地山に達し、この地山面で遺構を検出した。しかしT2区では表土の下に厚い整地層があり、他の地区と状況を異にしている。



第8図 調査地区設定図

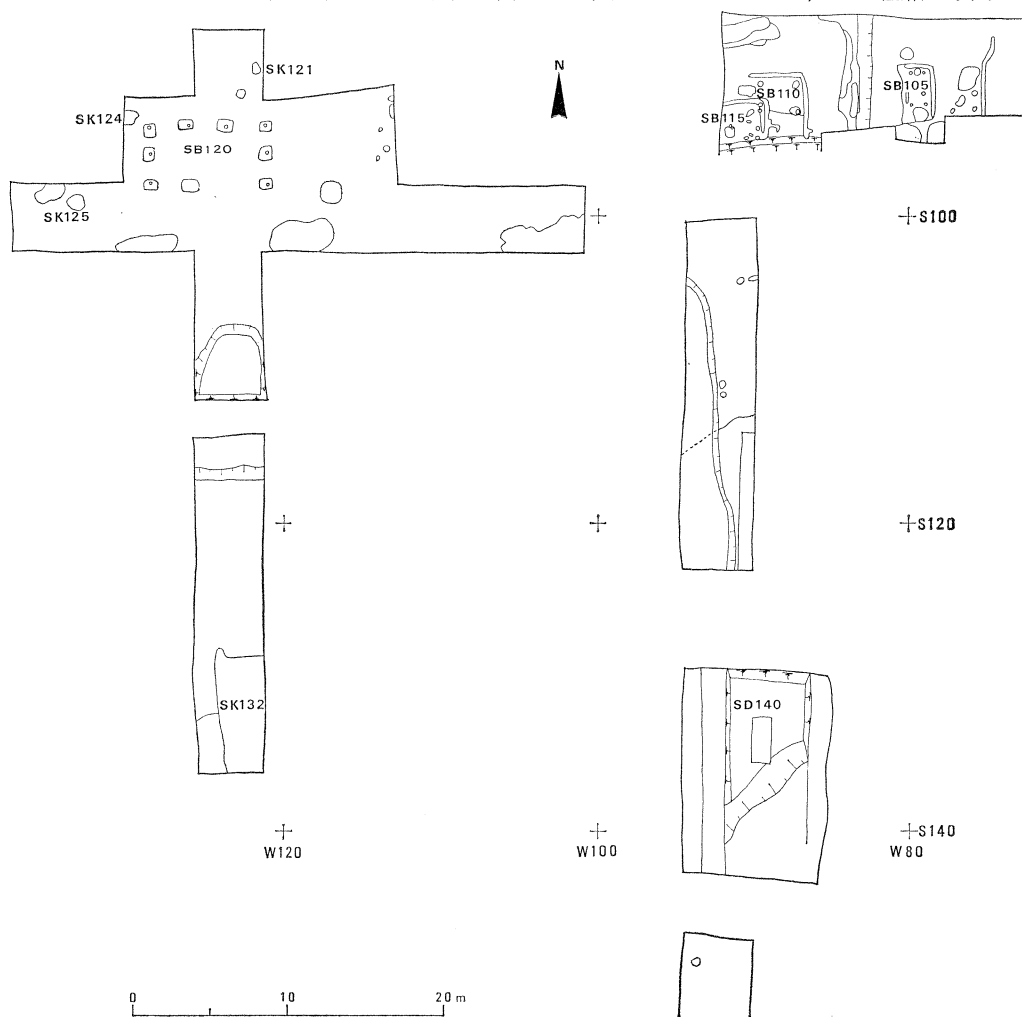
1. 各地区の遺構

T 1 区ではトレンチの北西部に直径30～40cm、深さ20cmほどの小穴 2 個を検出した。北側の小穴からは土師器皿、瓦器碗、ふいごが出土し、埋土に木炭・焼土を含んでいる。

T 2 区では斜行する大溝 S D140 がある。このトレンチでは厚い堆積層が遺構を覆っている。T 3 区では瓦器を含む小穴 4 個と西側にのびる大形の土壌 S K143 がある。また中央やや南よりにトレンチを斜行する落ち込みがある。これは T 2 区の大溝 S D140 の北岸にあてることが出来るが、自然の谷であるかも知れない。このことは後述する。

今回の調査地で最も高い位置にあたる T 4 区には、堅穴住居 S D105、S D110、S B 115 がある。ほかにこれらの堅穴住居と同時期とみられる土壌、小穴、溝などを検出した。

T 5 区ではトレンチ南端部に、瓦器を含んだ浅く広い土壌 S K131、S K132 がある。これらのうち土壌 S K132 が新しく、南側に帯状の高まりが東西にのびているが、その性格は明らか



第9図 軽池北遺跡遺構図

でない。

T 6 区では掘立柱建物 S B 120 がある。ほかにこの建物の周辺には浅い土壌 S K 121 ~ 127 がある。これらのうち S K 121 は古墳時代の遺物、S K 124 は弥生時代の畿内第 5 様式の土器を含み、S K 125 は瓦器を含んでおり、ほかは遺物を含んでいない。T 6 区の南端には深い落ち込み S K 128 がある。これはもとの丘陵の裾の一部にあたるものが、のちに厚い整地層によっておおわれたものと考えられ、この整地層は T 2 区の整地層と時期および性格が共通するものとみられる。この谷筋を埋めて旧地形を変える大規模な整地作業が行なわれた時期は、整地層に含まれている遺物からみると中世の一時期と考えられる。

T 7 区では、南端と北西の隅で小穴を検出した。このほか顕著な遺構はないが、S K 130 を検出した中央部から南にかけて一段低くなっている。

2. 主 な 遺 構

S B 105

T 4 区の中央やや東寄りにある竪穴住居跡である。東壁と北壁はよく残っているが、南壁と西壁は現地形が下がりはじめるところにあたり削平されていて明確ではない。西壁は柱穴の位置からみると、西側柱穴の西約 50cm の位置で検出した浅い落ち込みにあたるとみられ、この西壁と柱穴との間にある浅い溝を竪穴住居の西周溝の一部とみてよいようである。南側は S K 103 の南端と一致する浅い落ち込みとみてよい。以上のようにみれば、S B 105 の平面形は南北に長い長方形で、その広さは 2 m × 3.7 m ほどである。周溝は東と北で検出し、西でも一部溝の底を検出した。周溝の深さは東と北は 5 cm ほどである。柱穴は 4 隅にある。直径はいずれも 20 cm 深さ 20 cm ほどである。また住居の南端部には瓦器を含む土壌 S K 103 がある。炉もしくはカマドは検出されなかった。

S B 105 の埋め土は茶褐色土で瓦器、土師器小皿の小片を含み、周溝にも瓦器を含んでいる。また S K 103 は瓦器が多量に出土している。S K 103 は検出面からみると竪穴住居にともなったとみてよく、その位置からすれば貯蔵穴とみてよいであろう。

S B 110

T 4 区の西南部、S B 105 の西で検出した竪穴住居である。西南部分は S B 115 と重複しており、壊されている。また南部分は丘陵の斜面にあたっており、崖に沿って削平が著しく、南壁部分を失っている。ただ南壁の位置は南側柱穴の穿れた位置からみて柱穴の南約 50 cm ほどのところと考えられる。西壁はその痕跡を確認できなかったが、S B 105 と同形の平面とみると S K 107 の西端あたりとなる。現存する S B 110 の平面は東西に長い長方形を呈し、その広さは 4.5 m × 3 m ほどである。周溝は北と東で検出した。東側の周溝の南端は住居外にのび、地形に沿って南に流れ排水されていたと考えられる。柱穴は四隅にそれぞれあり、直径 45 cm、深さ 35 cm ほどであるが、西南隅のみは直径 25 cm、深さ 40 cm でやや小さい。柱穴はいずれも住居の中心に向って斜めに掘られており、その柱は内転びであったと考えられる。床面は一部で堅く踏みし

められている。この竪穴住居にも炉もしくはカマドはみられない。

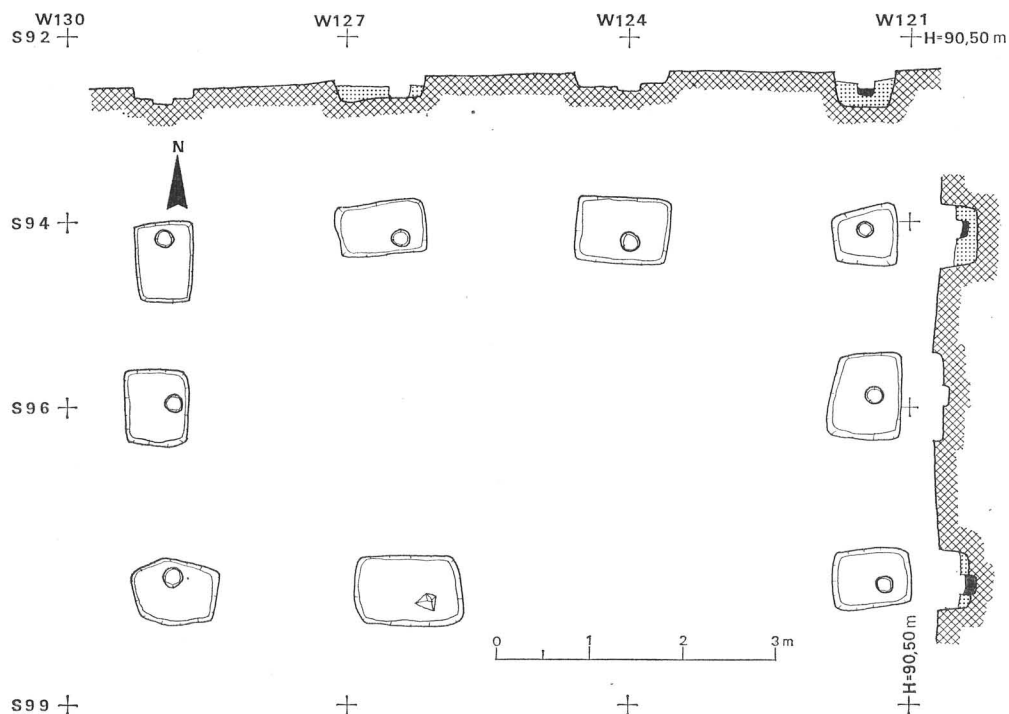
住居内の西端部ではSK107を検出した。この土壌からは瓦器が重って多量に出土した。SK107はSK110で検出したSK103と共通した性格のものであろう。深さは15cmほどである。

S B115

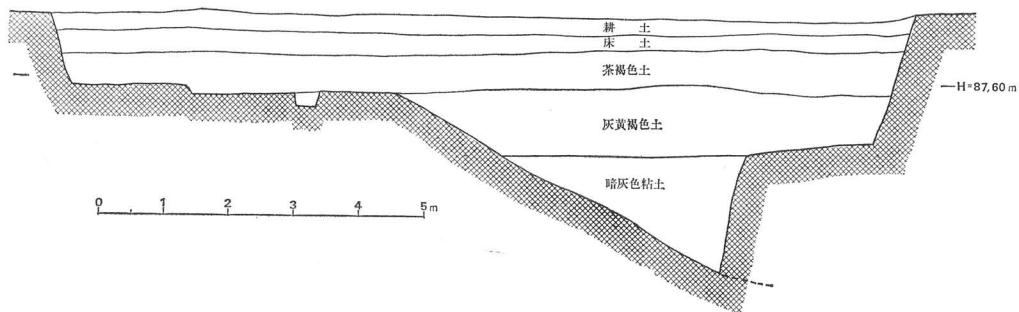
T 4 区の西南隅で検出した竪穴住居跡で、S B110と重複し、S B110の西壁を壊している。東壁と北壁を検出したが、西壁は未検出、南壁はS B110と同様に丘陵の斜面にあたっており、削平されて残っていない。したがって、平面形、面積とも明らかでないが、S B105、S B110と同様のものであろう。周溝は東と北で検出した。北周溝はさらに西にのびている。柱穴は東北隅のみ検出した。直径約30cm、深さ33cmである。ほかにSK108やSK109の小穴群を検出したが、S B115に關係するものかどうか明らかでない。住居内からは土師器、瓦器が出土している。

S B120

T 6 区で検出した3間×2間の東西棟掘立柱建物である。平面形は長方形を呈しているが、かなりいびつである。桁行の柱間は2.5m等間であるが、梁行の柱間はばらついていて1.7～2mである。柱掘り方は検出した半数ほどが約10cm、ほかは20cmほどで、いずれも浅く建物の周囲が全体に削平されていると考えられる。南桁行柱列の東から二つ目の柱掘り方が検出されなかったのは、浅かったので削平されて痕跡をとどめていないのか、もともとこの位置に柱が



第10図 S B120 平面図



第11図 T2区のSD140 土層図

なかったのか明らかでない。柱掘り方の埋め土は、いずれも褐色土に黄灰色土を混えたものであり、各柱穴で柱痕跡を確認した。柱痕跡は直径 20cm 程で、南側柱列の西から二つ目にはこぶし大の石があり、柱の根固めに用いられたものかも知れない。

SB120の柱掘り方の埋め土には、瓦および小片であるが、奈良時代のものともてよい土師器の須恵器片を数点含んでいる。

SK121・SK124

SK121はSB120の北にある大型長円形の土壇で、深さ15cmほどのものである。土壇の中からは古墳時代の須恵器高杯が出土した。またSK124はSB120のすぐ北西にある不整形の小型の土壇である。深さ10cmほどである。この土壇からは弥生時代の畿内第V様式の甕、高杯が出土した。また焼土や木炭も含んでいる。

SD140

T2区で検出した溝状の遺構である。最下層の緑灰粘土層からは藤原宮跡の出土例と共通する7世紀末の土師器、須恵器が出土し、その上の灰黄褐色土層は瓦器片を含んでいる。さらに上に茶褐色土が厚くおおっている。

このSD140の南岸は東北から西南にかけて地山が斜行しており、溝はこの地山に沿っている。北岸はT2区とT3区との間に調査地内を貫通する通路が通っており、T3区まで接続して調査することができなかったため検出しえていない。溝状の遺構もしくは自然地形によるせまい谷ないしは凹みにあたることも考えられる。自然地形に関係するものとすれば、T3区のSK143のさがりと関連する可能性もある。現状で検出しえている幅は7m以上で、深さは1.1mを測る。第11図はT2区の土層図である。